
追悼 本間三郎先生

高野 光司



第三代生理学教授、本間三郎先生は本年 6 月 27 日逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

本間先生は、大正 12 年 4 月 1 日長岡市でご出生。長岡中学 4 年修了、旧制新潟高校を経て千葉医科大学を昭和 21 年卒業。普通の年限より 3 年程短く卒業されたことになる。卒業後、鈴木正夫教授の生理学教室へ入室。福田篤郎助教授の第二生理学教授就任の後任として昭和 27 年おそらく本学卒としては記録的の若さで助教授に就任された。

それまで神経生理学ではカエルが主な実験動物であったが、教室のグループは先生を中心に、レプラ患者、ポリオ後遺症の電気治療に励まれた。先生はその頃「平衡回路法」を考案され、低周波治療学会の主要メンバーになられた。

昭和 27 年ストックホルムのカロリンスカ・ノーベル神経生理学研究所のグラニット教授のもとに留学、以後、自他共に許すグラニットの高弟であった。先生ご自身および、我々弟子たちにも香港シンポジウム「筋感覚器」、第 1 回ノーベルシンポジウム「筋感覚と運動制御」など国際

学会への参加、外国留学等広く門戸を世界に開かれた。3年ごとに開かれる国際生理科学連合会議、その他重要な国際会議には必ずと言えるほど出席発表され、昭和50年には、東京におけるシンポジウム「伸張反射への理解」に世界の碩学を集めて主宰された。

研究の主流は筋紡錘、脊髄運動系。臨床部門に進出する大学院生とは各器官からの感覚情報の研究に力をそそがれた。日本生理学会の中心人物として生理学実習の充実にもお励みになり、日本生理学会実習指導書を編纂され、もちろん本学の神経生理学実習を充実された。

昭和53年には日本学術会議第7部会員に当選、後に第13期同部長に就任された。

その頃からは脊髄生理学から脳の情報生理学に転向され、昭和58年退官、次期中島祥夫教授に引き継がれ、また中島教授や学外研究者とも共同研究をされた。

教授在任中、国内外の生理学教授10人、臨床教授5人以上が教室から輩出した。

朝永振一郎のノーベル賞受賞発表の日のこと。第一生理学教室の食堂黒板に誰かが書いた。「祝朝永振一郎教授ノーベル賞受賞」その後誰かが「医学生理学賞は本間教授に」と書き足し、またその後で誰かが「来世は」と書き足した。夕方6時、期せずして教室員が黒板の前に集まった。本間先生は、「来世は、と書いたのは、実は私だ。・・・かつて私は助講会で、千葉大学医学部からは、百年間ノーベル賞は出ない、と言ってしまって物議をかもしたことがある。」

先生は家庭にも才能にも恵まれた。ノーベル研究所随一の手術者。スキーではどんな難所でも先生が転んだのを見たことがない。時々「東大脳研一派は」とか「エックルス(63年ノーベル賞)一派は」とおっしゃったのは、日本一や世界一を目指しておられたからだと思う。

「来世」が仏教語なら、本間先生、安らかにお休みください。21世紀なら千葉大学医学部の後輩におまかせください。

高野光司先生のご略歴

1953年に千葉大学医学部ご卒業。千葉大学医学部生理学教室、助手、講師、助教授を経て、1971年ゲッティンゲン大学医学部教授運動神経生理部長にご就任。1996年同病態神経生理部長ご退役。

高野先生には、上記の追悼文をご執筆いただいたほか、2014年11月6日に開催された第25回千葉臨床神経生理研究会の開会の際に、故本間三郎名誉教授追悼のお言葉を賜りました。その後、研究会参加者全員とともに黙祷をお捧げくださいました。



高野光司先生



第 25 回千葉臨床神経生理研究会にて行われた黙祷

(2014 年 11 月 千葉大学大学院医学研究院認知行動生理学)